

投稿

## 暦法伝来の背景

佐藤 明達

嘉数次人氏の「日本の天文学のはじまり」[1]はよくまとまっていて分かりやすい。連載の次回が期待される。ところで554年百済から暦博士が来朝し、また602年観勒が来朝して暦本を献上するまでには両国間にどのようなきさつがあったのだろうか。

当時朝鮮半島北部には高句麗、南部には百済・任那・新羅の三国が鼎立していた。任那は小国の連合体で、日本の支配力は衰えつつあった。朝鮮の国家間の関係は不安定であり、日本と最も密接な関係にあった百済は何度も日本に援軍を要請している。六世紀半ば頃の日朝関係を井上秀雄氏は著書「古代朝鮮」で次のように述べる[角括弧内は引用者の注]:

欽明紀[欽明は天皇の名で、年号ではない]一二年(551)、百済の聖王[日本書紀では聖明王]は新羅・加羅[任那の朝鮮での呼び名]諸国と連合して高句麗と戦い、旧王都漢城地方を獲得し、大和朝廷への救援軍依頼は無用の年であった。しかし、翌一三年五月になると一転して、新羅は高句麗と連合して[ママ。「したので」か?]、聖王は加羅・安羅とともに大和朝廷に救援軍依頼の急使を派遣している。七月に一たん回復した漢江流域を新羅に奪われるので、一〇月には百済が最も重要視していた文化財の仏像・経典など仏具一式を大和朝廷に贈与して、救援軍の派遣を急がせている。翌一四年も正月早々から救援軍依頼の使節のあいづぐ中で、六月になって大和朝廷はようやく良馬二匹・船二隻・弓五〇張・矢五〇具を送るにすぎなかった。大和朝廷は百済が窮地に立っているのに乗じて医博士(医師)・易博士(卜占師)・暦博士などの交代の

時期が来ているので新たな諸博士を派遣するよう、また、卜書・暦本および種々の薬物を送るよう要求している。これに対し百済は八月に使節を派遣し、新羅と高句麗の連合軍が百済と加羅諸国を攻め危機に瀕しているのを、至急救援軍を送って欲しいと申し出た。(中略)

欽明紀一五年(554)も正月から百済の救援軍依頼があいついだ。そこで大和朝廷は救援軍一千名・馬百匹・船四〇隻を送る旨答えた。あたかもこの回答に答えるかのように、五経博士・僧侶・易博士・暦博士・医博士・採薬師・樂人などが百済からやってきた。大和朝廷の救援軍が実際に出発したのは五月で、諸博士の渡航を条件のように出発している。その後も、欽明紀一七年には百済王子恵[けい]の帰国に際して、護衛の兵士一千名が彼に従って百済に渡っている[2]。

これから約50年後は蘇我馬子を大臣(おおおみ)、聖徳太子を摂政とする推古天皇の時代である。文献3巻末の年表から日本書紀中の日本と朝鮮との関わりを抜き出してみよう。

このように、当時は朝鮮との間に頻繁な軍事的、文化的な交流があった。暦法渡来の背景には、複雑な国際関係が存在したのである。

文献3には、日本書紀の読み下し文と豊富な校注を付けた現代語訳が載っていて読みやすい。欽明天皇一四年の百済への要請は421頁に、翌年の暦博士らの来朝は429頁に、推古天皇一〇年の観勒の来朝は539頁にある。講談社学術文庫の文献4は安価で手軽に読める。この文庫には文献2も入っている。

古代朝鮮および日朝交渉史については、文献 2 のほか文献 5、6、7、8 などが参考になる。欽明天皇一四、一五年の出来事は文献 2

によったが、文献 9 にはそれが一層生々しく記述されている。

西暦	天皇年号	日本書紀記事
593	推古 一	四月、厩戸豊聡耳皇子（うまやとのとよとみのみこ、聖徳太子）を皇太子（ひつぎのみこ）に立て摂政とする。
595	三	五月、高麗[こま、高句麗のこと]の僧慧慈（えじ）渡来、皇太子の師となる。この年、百済の僧慧聡（えそう）も来朝。
597	五	四月、百済の王（威徳王）が王子阿佐を遣わし、朝貢する。十一月、難波吉士磐金（なにわのきしいわかね）を新羅に遣わす。
598	六	四月、難波吉士磐金、新羅より帰り、鵠（かささぎ）を二羽献上する。八月、新羅、孔雀一羽を献上する。
599	七	九月、百済が駱駝、驢（うさぎうま、いわゆるロバ）、羊、白雉を献上する。
600	八	二月、新羅と任那戦う。この年、境部臣（さかいべのおみ）を大將軍、穂積臣（ほづみのおみ）を副將軍に任じ、任那を助けて新羅を攻撃させる。新羅降伏するが、將軍の帰国後、新羅再び任那を侵す。
601	九	三月、大伴連嚙（おおとものむらじくい）を高麗に、坂本臣糠手（さかもとのおみぬかで）を百済に遣わし、任那を救うように命じる。十一月、新羅攻撃を協議する。
602	一〇	二月、来目皇子（くめのみこ、聖徳太子の同母弟）を新羅攻撃の將軍とし、軍兵二万五千を授ける。四月、来目皇子筑紫に到着する。六月、大伴連嚙・坂本臣糠手百済より帰国する。来目皇子、病にかかり、征討果たせず。十月、百済の僧観勒来朝する。曆本と天文や地理の書などを奉る。閏十月、高麗の僧僧隆・雲聡来朝する。
603	一一	二月、来目皇子、筑紫で薨ずる。四月、来目皇子の兄の当麻皇子（たぎまのみこ）を新羅征討の將軍とする。七月、当麻皇子、難波を発つが、妻の舍人姫王（とねりのひめみこ）が赤石（あかし）で薨じ、征討果たせず。[3]

### 参考文献

- [1] 嘉数次人、2007、日本の天文学のはじまり「天文教育」Vol. 19、No. 3、p.30  
 [2] 井上秀雄著「古代朝鮮」（NHK ブックス）日本放送出版協会 1972、pp.125-126  
 [3] 小島憲之他校注・訳「日本書紀 ②」（新編 日本古典文学全集）小学館 1996

- [4] 宇治谷孟訳「日本書紀 下」全現代語訳 講談社学術文庫 1988  
 [5] 朴炳植他著「古代朝鮮と日本」東京 泰流社 1987  
 [6] 砺波護・武田幸男著「隋唐帝国と古代朝鮮」（世界の歴史 6）中央公論社 1997

- [7] 井上光貞著「飛鳥の朝廷」(日本の歴史 3) 小学館 1974
- [8] 「世界大百科事典」第 18 巻 平凡社 1988、「朝鮮」の項 p.390
- [9] 梅原猛著「聖徳太子 1」集英社文庫 1993、pp.124-130 (文献 10 の文庫版)
- [10] 梅原猛著「新版 聖徳太子 上」小学館 1989、p.504

{付記}梅原猛氏は六世紀後半から七世紀初めにかけての日本の立場を次のように要約した。

日本は極東の孤島である。それは海を隔てているので外国の侵略を蒙ることが少ない。高句麗や百済のように、二つ以上の敵国から攻められるということは考えられない。海は島国・日本の最大の安全保障であった。聖徳太子や馬子は、この日本の地理的有利さを最大限に利用しているように思われる。新しい東アジアの風雲の中で、朝鮮三国は戦々競々として、よしみを日本に求めてきている。今こそ、この外交的に有利な立場を利用して、文化を安く海外から移入して、日本を近代国家にしなければならない。

もう二度と中国の皇帝の前で恥をかかないような国家組織を早急に作らねばならない。太子と馬子は協力して、海外から文化人を呼び、その力で日本を近代化しようとしていたのである[10]。